A
文献センター通信
第46号
2019年3月1日
一部100円

入管法改定を批判する

山口智之

昨年12月8日、出入国管理及び難民認定法の改正案（改悪案）が可決、成立した。誰もが唖然とするほど杜撰かつ拙速な審議であった。これにより新たな在留資格が創設されることとなり、いわゆる「単純労働」に従事する外国人労働者受入が始まることとなった。その数は5年間で約35万人とされる。施行は2019年4月予定である。（ちなみに現在の外国人労働者数は約146万人）

私はこれまで12年間にわたり外国人労働者を組織するAPFS労働組合という労組の執行委員長を務めてきた。その経験も踏まえ今回の入管法改悪と、さらには今後外国人の定住化により彼・彼女らが直面せざるを得ない問題について述べてみたい。

これまで政府は専門的・技術的分野については職業ごとに「教授」「経営・管理」「報道」といった名称の在留資格を認め、就労を許可してきた。一方、飲食店勤務や工事現場作業、ホテルの室内清掃などの非熟練労働（「単純労働」）に該当する在留資格は一貫して認めず、入国を許可してこなかった。「単純労働」に従事する外国人は、①「定住者（日系2世、3世等）」や「日本人の配偶者等」といった身分又は地位に基づく在留資格を有する者、②資格外活動許可を受けた留学生（入国管理局への届出により就労時間上限週28時間まで就労可）や技能実習生、③難民申請中で、とりあえず就労が許可された者、といった特殊なケースにのみ限られてきたのである。これは「移民」に反対する保守派の意向によるものであった。

だが、労働力不足が深刻度を増す中、財界の要望を無視できなくなった政府はついに「単純労働」外国人労働者受入に舵を切った。

今回創設された在留資格、特定技能（1号、2号）は、次のように定義されている。

「特定技能1号」とは「不足する人材の確保を図るべき産業上の分野に属する相当程度の知識又は経験を要する技能を要する業務に従事する外国人向けの在留資格」であり在留期間は上限5年（つまり、5年を経たら帰国せざるを得ない）。家族の帯同は認めない。

「特定技能2号」とは「熟練した技能を要する業務に従事する外国人向けの在留資格」であり在留期間は、個々の在留状況に応じ何回でも更新でき、最終的には永住許可の取得も可能である。配偶者や子など家族の帯同も可能だ。

なお、受入れ業種については介護業、ビルクリーニング業、建設業、農業、外食業等々、14業種とされている。

やはり論外なのは「特定技能1号」の非人道的な内容である。外国人労働者を5年間だけの労働力＝労働機械としてしか見ていない。労働機械が日本に定住することなど許さないというわけだ。家族の帯同を許さないのも酷い。日本で就労したければ家族離れ離れで5年間暮らせ、というのである。

さらに許しがたいのはこの在留資格が悪名高い「外国人技能実習制度」と接合した制度設計であることだ。3年間の技能実習を修了すれば無試験で「特定技能1号」へ移行できるのである。技能実習修了生のおよそ半数が「特定技能1号」へ移行するとも推測されている。

技能実習制度とは海外では人身売買と認識され、国連から何度も改善の勧告が出されている、いわば現代の奴隷制度である。技術移転（「開発途上国」から受入れた技能実習生が日本で技能や技術・知識を習得し、将来母国でその技術を活用し母国の発展に寄与する）を通じた「国際貢献」を名目としてはいるが、実際には海外からの安価な労働力確保のた

主な内容

入管法改定を批判する……1
禅の観点から見たアナキズム……4
古本屋オヤジの旧書紹介……6
「闇に刻む光展」を見て……8
「自由労働者連合」の紹介……11

めの経路として利用されてきたのである。

今やその実態がマスコミでも広く報道され、批判の的となっているのはご存知の通りだ。現在も多くの技能実習生が最低賃金前後で長時間労働を強制され、逃亡防止のために在留カードやパスポート、さらには銀行通帳までを取り上げられ奴隷労働を強いられている。更には実習生受入企業と、本来は受入企業で適正に技能実習が実施されているかを監理・指導する立場の監理団体が結託して、気に入らない実習生を無理やりに強制帰国させる事態まで頻発しているのだ。このような奴隷制度と接合する在留資格などあってはならない。

また、この入管法改悪とセットになっているのが「法務省設置法」を改悪し、法務省外局として「出入国在留管理庁」を設置するという案である。つまり、外国人労働者のみならず外国人全体に対し、管理・監視が一段と強化され、その生活全体が法務省の支配下に置かれるということだ。「外国人は煮て食おうが焼いて食おうが勝手」という恣意的な政府／法務省の姿勢が更に露骨になるということである。

これでは、外国人労働者を安価な労働力として活用し、あげくは使い捨てることを入管法が担保するようなものだ。

4月以降「特定技能」、特に1号で入国する人々の多くは過酷な労働環境に苦しみ労働者としての、そして人間としての尊厳を大きく傷つけられることになるであろう。

なお、次号では進む外国人労働者の定住化傾向と、そこで起こる問題について触れてみたい。

毎年開かれているミャンマー人の水かけ祭

国内ニュース

第58回管野須賀子墓前祭 代々木・正春寺で開催

1月26日、大逆事件処刑109年追悼集会、「大逆事件の真実をあきらかにする会」主催の第58回管野須賀子墓前祭が、標記の集会として例年通り東京代々木の正春寺で行われた。

恒例の各地の会からの報告は盛りだくさんだったが、全国各地で高齢化による会員の減少が進んでいるためか、一昔前には百名前後の参加者だったのが今年は70名ほどとなっていた。夕方からの懇親会参加者は30名弱と、これはあまり変化はないようだった。

LAC主催「分断の時代を越える　2・2シンポ」開催

2月2日、スペースたんぽぽ（東京）にて反資本主義左翼（LAC）主催の講座、「分断の時代を越える2・2シンポ　1968－89年―そして世界と日本の『現在』を考える」が約40名の参加で開催された。

メイン講師は小倉利丸氏（現代資本主義批判研究）、パネリストは山口智之氏（APFS労働組合）、津川勤氏（差別・排外主義に反対する連絡会）、原隆氏（NO―VOX Japan）。司会は坂本健氏（早稲田あかね）。

小倉氏の講演ではサパティスタや世界社会フォーラムといった反グローバリゼーション運動高揚期の運動の限界や、現在の「黄色いベスト運動」がはらむ問題（右翼、排外主義者の介入）などが語られ非常に魅力的であった。

また、当日は時間の関係で触れられなかったが氏のレジュメには「（市場経済の持つ「自由」の側面により）国家の権威主義的な介入や国家権力による自由への干渉を否定する手段として市場経済の自由を最大限に拡張することを肯定する資本主義的アナキズムの主張が登場することにもなる」という一節があり、これは一時期妙にもてはやされた「アナルコ・キャピタリズム」のことであろうが、何か苦いものを飲まされたような気がした。

一方、後半のパネルディスカッションは、当日のテーマや小倉氏の問題提起に応えるものがなく、話題がクルクル変わり議論は深まらなかった。もう少し工夫があっても良かったのではないか。

海外ニュース

英国、階級戦争（Class War）グループ

１９８３年にイアン＝ボーン等が設立した英国の階級闘争グループは、同名の新聞の発行や「Bash The Rich（金持ちを殴れ）」イベントなど様々な行動を行っていたが、１９８５年以降分裂し、活動が途絶えていた。２０１０年代に入り、このグループは復活し、２０１５年の総選挙に政党として登録して選挙に出たり、切り裂きジャック博物館の前でデモをしたりしている。

２０１９年1月12日、「緊縮財政に反対する民衆集会」が、英国版の黄色いベスト運動と称し（政治利用し）て「英国は崩壊している…今こそ総選挙を！」というデモを全英各地で行った。もちろん、フランスの黄色いベスト運動とは無関係であった。

これに対し、階級闘争グループは、英国の労働者階級の問題を解決するには総選挙ではなく、革命だ、として対抗デモを行った。

階級闘争グループは、2月21日にも「シティを止めろ」という行動を呼びかけている。

階級闘争グループのホームページは以下（英文）
http://www.classwarparty.org.uk/
ツイッターは以下（英文）
https://twitter.com/Classwar2015

2月21日の行動については以下（英文）
http://www.ainfos.ca/en/ainfos38784.html

（翻訳・編集…森川莫人）

追悼・田代学

田代学君を追悼する

古くからの同志でもある田代学君が2月7日未明に（自宅近く）松江市の病院で静かに息を引き取った。まだ63歳だったと思う。

彼は10代の頃よりアナキストを自称し、１９７０年代に多発した爆弾闘争にも関心を持っていた。70年代後半には共に黒色救援会を立ち上げ、爆取弾圧と闘う救援会議にも関わった。１９７６年に起きた北海道庁爆破事件（2月12日に第3次再審請求を行った）に私がかかわるようになったのも田代君の紹介であった。

彼は一貫してアナキズム運動に関わり続け、昨年病魔に侵された後も病床から運動の行方に気を揉んでいた。

田代君の訃報を伝えた友人の一人は、「ありきたりのお悔やみの言葉は田代君には似合わない、今後の運動と言動で応えていくつもりだ！」と。しかり、まさにそれこそが田代君の弔辞にふさわしい。

（軽部哲雄）

田代君の逝去の報、複雑な気持ちで受け取りました。

実は昨年の夏ごろ彼にメールを送ろうとしました。

しかし、書きかけて中断してしまいました。その後の闘いのしんどさがよみがえったためかもしれません。私の精神状況が不安定であったためかもしれません。同志としての長い、時としては危険な関係でもありました。

私らを追い回した警察関係者も既に亡くなっている者も多いと考えます。

逝きし者にどのような言葉をかけたらよいか、いまはわかりません。

よく飲んだ……サルー！

（matsu）

後輩にあたる、年少者の訃報はこたえます。

活発で、人なつっこい好漢でした。「松江で何かできることは」と問われたので「どこにいても、何でもできる」と応じ「それがオレ達の思想やろ」と詰めると、ちょっと困った表情になって、笑った。

その笑顔は、懐かしいというより、今も、なにかまぶしい。

（武智 忍）

□追悼・戸田三三冬❹

禅の観点から見たアナキズム（上）

戸田三三冬

＊1983年6月、ナポリでのイタリア語による講演録（翻訳・琴代龍明）

日本で私は、禅の影響を受けた文化環境の中で生きてきた。私は、アナキズムとエッリコ・マラテスタ（1853―1932）「ナポリの人で第一インターナショナル時代のアナキスト」（イタリアでは、第一インターナショナルの最初の支部は、他ならぬナポリに1869年に設立された）の思想を知った時、その考え方の中に仏教の禅の思想が貫かれていることを知った。確かに東洋の文化環境のなかで自己形成した人物が西欧文化の産物に初めて接触したとき、その理念を理解するのに、自身の経験に根ざした独自の道筋をたどるものだ。私にとって、仏教と無政府主義というふたつの思想は、渇望の方法として、生き方の上でも考え方の上でも何ら矛盾するものではなかった。

人間は、原初から、生まれること、生きること、死ぬことといった現実の諸問題を、思索の非常に大きな材料として論議してきた。人間は、自分自身で生まれることもできず、一人で生きることもできない。この問題は、どんな社会でも一般的で、かつ、共通であるということができるし、また、そのことで二つの面が生じると言える。どのように生きて、どのように死ぬかという面。社会の中でどのように生き、死ぬか、つまり、他者との関係において、どう生き、どう死ぬかということだ。私の考えでは、仏教もアナキズムも、多かれ少なかれ、この二つの面を提起している。

私たちは、私たちの運命を避けることができないのだから、そして、そこでは、他人と一緒に生きることを強いられ、また、一人で死ぬために、誰もが解決すべき一連の問題が生じることになる。

―運命が私たちに強いるすべてのものを、私たちはどのように生きることができるか。

―人間であるという私たちの可能性を私たちはどのように実現できるか。

―歳を取ることと死ぬことの恐怖を私たちはどのように避けることができるか。

私たちが扱おうとしている二つの主題の間に横たわる繋がりと関係に立ち向かう前に、個々の思想を別々に提示するのが、都合がよいように思われる。まず、アナーキーとアナキズムから始めるが、マラテスタ自身の言葉を再掲しよう。

アナーキーとは、社会的共生の方法のひとつであり、そこで人間は兄弟として生きる。そして、一切の抑圧する権力もなく、他人を搾取することもなく、そして誰もが、その時代の文明が道徳的および物質的な最大限の発展を達成することで与えることができる、自分の立場と方法を持っているだろう。そして、アナキズムは、自由によって、支配することなく、すなわち、たとえ善意であっても、力を持って他人に特定の意図を押し付けるような権力も使わずに、アナーキーを実現するための方法である。（エッリコ・マラテスタ「思想と意思」と最後の諸著作、著作集第Ⅲ巻、ジェノバ、Risveglio版、1936、リプリント、カララ、1975、「思想と意思」1925年9月1日）。

アナキズムは、社会の不正に対する精神の反逆から生まれた。人間に関して、私たちが生きることを強いられている社会的環境から抑圧されているように感じ、また、その感覚が自分の痛み同様に他人の痛みという被害であるということがわかったとき、そして、こうした人間である私たちが、人の痛みの大きな部分が避けられない自然のあるいは超自然的な法則の宿命的結果ではなく、それどころか、人間の意思に従い、そして、人間の営為で除去できる社会的行為から生じることを知ったとき―そのときこそ、アナキズムに通じるはずの道が開けたのであった。

また、ある人々が不正の根本的原因は、勝利した結果の支配権を持つ人間と負けて抑圧され搾取される人間の間の闘争であると分かり、また、一方のこの支配と他方のこの服従が、歴史的変遷を織りなして、資本主義的所有と国家の頭部をなしていることを知り、そして、我々が国家と所有の打倒を決意した時―そのときにこそ、アナキズムが生まれたのだ…重要なことは、人をアナキストにするものは、自由への意識、自由への渇望、すべての者の幸せ、全ての

人の間の愛である。（著作集第Ⅲ巻、pp.171―172、「思想と意思」１９２５年５月16日―17日）。

アナーキーは…人間の渇望…であり、人間の意志によって実現できるし、あるいは、実現できない渇望である。（著作集第Ⅲ巻、p.176、「思想と意思」１９２５年７月１日）。

アナキズムの綱領は、連帯と慈愛に基づき、正義そのものを越え、…慈愛は人々になしうる限りを与え、…他者に自分がしてほしいと思うことと同等のものを与える。それは、キリスト教徒が愛徳とよび、私たちが連帯とよぶ、要するにそれは慈愛である。（ルイギ・ファブリ『マラテスタ、その人と思想』p.22）

私たちはマラテスタのアナキズムが、アナーキーを実現するための方法として、人間の歴史の瞬間として考案された、資本主義社会と国家に対して抵抗する意図を持っていることを見た。したがって、資本主義と国家の廃止なくして、アナーキーを実現することはできないが、それだけでは十分ではない。なぜなら、マラテスタのアナキズムの理想の中で霊性（精神性）が決定的に重要であるのだから。

憎しみから革命は生まれない、愛からしか生まれることはない。

重要なことは、アナキストを生み出すものは自由への感情と渇望、全ての人の幸福と全ての人の間の愛である。

アナーキーは…人間の渇望…、人間の意志によって実現できるし、あるいは、実現できない渇望である。

だから、「心」それ自体が、とりわけ重要で、「正しい心」がアナキストをもたらし、そして、それなしには、アナキズムを建設することはできないし、いかなる革命も行うことはできない。

私の見解では、マラテスタは社会的関係のすべての階級的秩序を変えて、人類の、男と女の、男と男の、女と女の新しい関係を、アナキズムの精神をもって、言い換えれば、自由と正義、平等、それに愛をもって、創造したいと思っていた。

革命は遠い未来ではなく、それどころか、革命は、ここに、私と共に、キミと共に、私たちの生き方の中にある。なぜなら、私たちは毎日を、他の人との関係を創り出し、維持するようにしか生きてゆくことはできないからである。では、どのようにして新しい関係を作り出すのであろうか。

社会革命の目的として、「自由、公正、平等」を求めるのは容易いことだ。しかし、さらに難しいのは、私たち各自の行動を変えることである。特に、男と女の間にある関係、現在の社会の中での男と女の役割について考えてみるだけで充分である。

このように見ると、アナキズムは仏教の禅に非常に近い。仏教は無限に広大な空間と無限に長い時間の透視図を提案するが、ただ人類だけでなく、動物や植物、花、それに、世界に存在するどんな物も仏教による興味の対象であるのだから。人間の歴史と先史時代の瞬間もこれと同じである。内的宇宙が、時間として、また、空間として、ここに教示される。

曹洞禅の開祖である道元禅師の教えによると、すべての人間にとって、非常に重要な問題は、極めて限られた一生を過ごしながら、どのように生き、どのように死ぬかということである。我々一人ひとりにとって人生の目的はどのようなものであろうか。どのような方法で、私たちは苦痛や困難、死に打ち克つ力を獲得できるのだろうか。生死事大、無常迅速、人生は、とても短く、つかの間の瞬間であり、その後私たちはそこにはいなくなるのである。

私たちは私たちの運命を逃れることはできない、私たちはこの世に生を受けそして死ぬ、すべての存在とおなじく、おなじ運命を共有し、すべての者が生まれ、生き、死ぬという同じ過程を被ることになる。すべては変化し、それは絶えず、かつ、連続的に変化するが、そのことを私たちは自分では気づかない。

しかし、私たちがこの引き続く変化を、この絶え間のない動きを観察するならば、私たちはおそらく、そのことから、その原因を見つけるであろう。ひとつの結果は必ずひとつの原因から生まれる（因果）、それから、ひとつの結果は直ちに別の原因に変わり、ひとつの別の結果から同じよう次に続く。

（以下次号）

◉訳者から

ひょんなことから、慣れないイタリア語に取り組むことになった。翻訳しているうちに、戸田さんが乗り移ってきた感じがして、途中からは彼女が言いたいことに導かれて訳したように思う。内容が、訳者の現在の状況に見合っていたようだと感じることが多かった。

（琴代龍明　２０１８／６／18）

〈第五回〉古本屋オヤジの旧書紹介

秋山清著『日本の反逆思想』

川口秀彦

今回の『日本の反逆思想』は、いま私の手元に四冊、倉庫にもあと何冊かは在庫があるから珍しい本ではない。初版は一九六〇年十一月、副題が「アナキズムとテロルの系譜」となっている。並製(ソフトカバー)の新書判である。六八年の新装版発行に際して、上製（ハードカバー）函入本となり、副題は「無政府主義運動小史」に変更されている。七二年の新装版四刷では同じ上製函入でも表紙の材質が変っている。四年間で四刷だから一年に一度の重版ということだろう。この現代思潮社の新書判上製函入本（現代思潮社では、四六判より幅が小さいことから三六判と呼んでいた記憶がある）のシリーズには、大沢正道『アナキズム思想史』、萩原晋太郎『日本アナキズム労働運動史』もある。六〇年安保の後に出された、吉本隆明、埴谷雄高ほかの『民主主義の神話』や、同社編集部編の『装甲車と青春―全学連学生の手記』なども同じシリーズで、六〇年代から七〇年代初頭にかけては、ロングセラー的に重版されるものの多いシリーズだったので、現在では少なくなったが、今世紀になった頃までは古本市場では良く見かけていた。

『日本の反逆思想―無政府主義運動小史』は、七七年に増補版が三一書房から三一新書として刊行されている。三一新書も六〇年代から七〇年代前半には良く売れていたものが多いが、その時期を過ぎて三一新書となったこの本が重版されるほど売れたのかどうか、私は初版しか扱ったことがない。

六一年一月のアナキスト連盟機関紙『クロハタ』にこの本の新刊紹介が八百字を越す文章で掲載されている。M・Oの署名で、文意は待望の本が出たという高評価である。ただ文末に「誤植もしくは誤記が若干目立つようだ。……中略……事実記述の場合は重箱の隅をほじくるような歴史研究家に揚足を取られぬ注意が肝要であろう。」という指摘がある。私のところにあるこの本の最初の版は、実は大沢正道さんの蔵書整理で出てきたもので、秋山さんから大沢さんへの献本署名本である。この署名本が、訂正原本(刊行後に見つかった誤記誤植などを重版の際に訂正するための資料として、完成刊行された本に直接訂正のための赤字を入れたものを、編集者または著者が作成する）のように赤字と符箋だらけの本になっているのだ。符箋の数が二十余りで、赤字箇所はそれ以外にもある。百八十頁の本としては多いといえる。献本の日付が六〇・一二・二となっているから、大沢さんは『クロハタ』の締切までにこの本を精読し、秋山さんに代わって訂正原本を作るような勢いで赤字を入れたのだろう。三十代前半の現役編集者の大沢さんにとっては、誤記誤植は容易に見つけられただろうが、事実誤認など校閲的な指摘は多少は調査の時間がかかったのかも知れない。この大沢作訂正原本も参考にしたのか、現代思潮社版の新装版では大沢さん指摘の赤字（要訂正箇所）はかなり解消され、三一新書の増補版ではすべて無くなっている。

大正から昭和前期にかけては、この本はかなり近藤憲二の『私の見た日本アナキズム運動史』（初出は五二年からの『旬刊平民新聞』での ち五八年十月から六一年一月まで『クロハタ』に転載、六九年に麦社パンフレットとして単行本化、七二年に麦社から増補版出版）に依拠している。近藤本は紙面の制約もあり、客観的で正確、簡潔な記述をめざしたためか、平板に思えるところがある。この点秋山本は、実際に見聞したものを詳述するなど、記述に濃淡があり面白いものになっている（たとえば第二章「アナルコサンジカリズムと大杉栄」冒頭の桑原錬太郎の話）。また近藤本にはない明治期(直接行動論と幸徳秋水）に一章を割いているし、少しだが戦後の記述もある。

ともあれ、この本はまだ手軽に入手できる運動史としての役割は失ってはいないと思う。このレベルの戦後運動史はいつ出現するのだろうか。

書評『アナキズム』（栗原康／岩波新書）

相田慎一

本書は、若きアナーキスト栗原康が、今を生きることに苦闘している若者たちに向けて「アナキズム」をプロパガンダしようとする書である。本書の最大の特徴は、こうした今を生きることに苦闘している若者たちに「アナキズム」をプロパガンダするために、彼らが日常のなかで使用している「若者言葉」を使って、しかも彼らの「フィーリング」に寄り添うようなかたちで書いていることであるだろう。したがって、本書が成功したか否かを評価する際には、こうした本書の内容が今を生きることに苦闘している若者たちの「フィーリング」にどれだけ寄り添えるものになっているのかという点も同時に検証されなければならないと、評者は考えるものである。

だが、そのことを検証する能力は72歳の老人となってしまった評者にはない。ここで評者が取り上げることができるのは、本書の著者が今を生きることに苦闘している若者たちに伝えようとしている「アナキズム」をいかに理解しているのかという問題だけである。

本書を読むかぎり、本書の著者は、「アナキズム」を多種多面的にそして自由に理解しているように見える。だが、それにもかかわらず、その背後には「自発性の暴走」という概念があることに、注目しなければならないだろう。

ここで本書の著者が使用する「自発性の暴走」という概念は、「非日常」としての「祭り」（暴動や革命）を求めようとする「積極的アナキズム」の思想を示すものである。そのかぎりで、著者の「アナキズム」思想は、「日常的生活」の中で最低限「個人の内面的自由」が保障される状態でよしとする「消極的アナキズム」思想と決定的に異なったものである。その点で、この二つの「アナキズム」思想は今後多くの齟齬をもたらす可能性をもつことになるかもしれない。だが、解決策がないという訳ではない。

その解決策のひとつは、「アナキズム」思想とその実践とを区分し、実践における「多様性」を認めることであるだろう。こうした実践における「多様性」を今後どう実現していくのかという問題の所在を明らかにした点にこそ、本書における「アナキズム」論の最大の功績があるのではないだろうか。

最後に本書ではほとんど触れられることがなかったけれども、今や再考しなければならないと評者が考えている問題がある。それは、「アナキズム」と「社会主義」の関係の問題である。

多くの人々や多くのアナーキストたちは、「アナキズム」（評者は、「アナキズム」とは、内的にはあらゆる神と権威を否認する姿勢であるとともに、外的にはあらゆる国家と政府を否定する姿勢のことであり、すべての者の「自由」を求める思想であると規定する）は、「社会主義」（評者は、「社会主義」の最低限の要件は「所得の再分配による格差の是正」という「平等」を求める点にあると理解するものである）の一潮流であると理解してきたし、また現在もそう理解している。だが、この理解は正しいのだろうか。私には正しいとは思えない。なぜなら、「アナキズム」にとっての最高の価値が「自由」であるのに対して「社会主義」にとっての最高の価値は「平等」であり、両者はその思想の本質的な点において異なったものといわざるをえないからである。

もちろん、すべての者の「自由」の実現には「格差の是正」が不可欠の要件になるだろう。その点で、「社会主義」は「アナキズム」にとっても不可欠な要件にあるといえるのかもしれない。

だが、「現存した社会主義」のように「格差の是正」を行う主体は、強大な国家であり、特権的官僚層である。彼らは自らの特権を守るために常に「格差の是正」（平等）を名目としてすべての者の「自由」を否定し、スターリン主義のような独裁国家を生んだ。このように「格差の是正」が「自由」の否定を意味する場合には、「アナキズム」は「自由」を優先させなければならないだろう。その意味で、「アナキズム」にとって、強大な国家権力や特権的官僚層と不可分の関係にある「社会主義」は優先順位の低い副次的要素にすぎないというのが、評者の今のところの理解なのである。

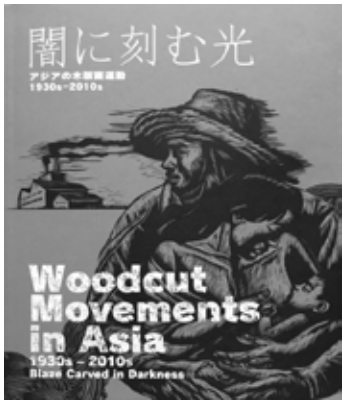
その点でたいへん興味深いのは、本者の著者も「アナキズム」における「平等」の実現という問題には完全な沈黙を貫いていることである。その理由を聞いてみたい。

連載（1）

「闇に刻む光」展を観て―私的な雑感

細谷 修平

２０１８年の暮れ、福岡アジア美術館で開催された展覧会「闇に刻む光　アジアの木版画運動１９３０ｓ―２０１０ｓ」展を観るために福岡を訪れた。本展はアジアの「近代化」を民衆主体の表現である「木版画運動」から捉え、政治・社会運動におけるメディアとしての版画、そこに生まれたアジア民衆の連帯を提示した画期的な展覧会である。これは、同館学芸員で企画者の黒田雷児による地道な調査と担当学芸員らの日夜の努力、協力研究者、そして出品作家／集団の団結によって生成された、運動としての展覧会だと言っても言い過ぎではないだろう。



展示会場では、ケーテ・コルヴィッツ、魯迅と内山嘉吉らによる「木刻運動」に始まり、日本、ベトナム、フィリピン、韓国、ベンガル、インドネシア、シンガポール、マレーシア、台湾と、各地の「木版画運動」の軌跡が時代を追って版画やさまざまな資料から紹介され、自立を希求した無数のアジア民衆の姿を浮かび上がらせていた。本展では、黒田もカタログで言及している通り、国家や党派による特定イデオロギーの「上から」の表現ではなく、また権威的な美術家個人の作品でもない、民衆主体の「下から」の表現である木版画の数々が展示されていた。

さて、わたしが福岡を訪れた際、韓国の民衆美術家であり、市民軍の文化宣伝隊として80年代の光州民衆抗争を闘った洪成潭（ホン・ソンダム）さんと再会することができた。再会というのだから初めて会うわけではないが、展覧会で洪さんの「五月版画」を観たばかりであり、握手をしたときには胸がぐっと熱くなった。戒厳令が敷かれ、大弾圧と情報統制に身を縛られる中、版画という自力のメディアによって外へとその状況を知らせ、国家権力に徹底抗戦したその人の手は暖かく、いつもの優しい笑顔を向けてくれた。

わたしにとって80年代は自身が生まれた年代であり、何もかもが資本主義とマスメディアによって設えられた、息苦しい幼少体験の時代である。しかし、自分自身が何者であるかを問うために、いつかはこの時代と向き合わなければならないとも思っている。洪さんたちの運動はそのための手がかりを与えてくれるのではないだろうか。遠いようで近い人びとの歴史を聞くなかで、わたしたちの姿もまたそこにあらわれるだろう。朴正熙を軍人として育てたのは紛れもなく日本帝国主義であり、東アジア反日武装戦線はその日帝を告発した。そして80年代、日本中が資本主義に浮かれていたわけではない。〈風の旅団〉は金南柱の詩片とともに韓国民主化に連帯して芝居をおこない、〈A-Musik〉は光州蜂起に呼応してさまざまな現場で演奏をした。耳を傾けなければならないことはまだまだあるはずだ。

展示会場の洪さんらの版画の奥には、２０００年代以降、韓国の運動現場で版画制作を続ける李允燁（イ・ユニョプ）による《鶏頭の花畑で（龍山復活図）》が展示されていた。今から10年前、ソウル・龍山（ヨンサン）地区の再開発による立ち退きに抵抗する住民に対し、対テロ部隊が投入され、その過程で起きた火災によって住民５名、警察官１名が死亡するという「龍山惨事」が発生した。この亡くなった住民を描いた版画が「龍山復活図」である。「龍山惨事」の現場では「キャンドル・メディアセンター・レア」が自力のメディアセンターとして開設され、わたしも１ヶ月ほど滞在し、寝食と闘争を共にした。現場では、２００８年のＧ８対抗運動で活躍したメディア活動家たちが毎日、インターネットラジオやネットでの映像配信を通して、抵抗する住民の生活状況や思いを伝え続けた。ＳＮＳが広がる前、メディア活動家たちは自律した意志と技術によって、情報を発信し続けていた。わたしは、これが自力で民主化を勝ち取った民衆が育んできた伝達の意志なのだと実感したのを覚えている。ＳＮＳが広がり、情報に溢れかえる現在においてもそれは変わることはないだろう。周りに流されず、自律した意志によって真実をみつめ、連帯する仲間を探し、行動を共にする。

自らの力で連帯のためのメディアをつくり（あるいは自身がメディアとなり）、発信し続けること。そして、民衆の歴史は民衆主体によって編んでいくこと。「闇に刻む光」展はわたしたちに多くの課題を投げかけてくれた。この展覧会は、アーツ前橋に巡回し、2月2日から3月24日まで開催される。

【報告】台北「關渡雙年展」で文献センター資料を展示

成田 圭祐

2018年10月5日から2019年1月6日にかけて、台北の関渡美術館で開催された美術展「關渡雙年展【給亞洲的七個提問】」に、IRREGULAR RHYTHM ASYLUMとして参加した。展覧会のテーマは「アジアについての7つの問い」。担当キュレーターからは、アジア諸地域の仲間と連携するIRAの活動を紹介してほしいという要望を受けていたので、IRAを拠点に活動する木版画コレクティブA3BCとソーイング・サークルNU／MAN、そしてアナキズム文献センター（東京事務局）という3つの部門から、それぞれ活動にまつわるの作品や資料を展示させてもらうことにした。

A3BC部門では、自分たちの作品と共に、普段から連絡を取り合っている台湾、香港、インドネシア、マレーシアの版画コレクティヴの作品を展示。NU／MAN部門では、アジアの搾取工場で生産され日本で消費された古着Tシャツの再利用プロジェクトを紹介し、ワークショップも行った。文献センター部門では、エスペラント語を駆使して主に中国の同志と連帯のネットワークを築いた山鹿泰治や、中国を二度旅し魯迅とも交流した新居格、また、当センター富士宮図書室を管理する龍武一郎がインドのWRIメンバーと共に歩いた64年の平和行進や、ベトナム反戦直接行動委員会などを取り上げ、関連資料や写真パネルを陳列した。他の展示作品とはやや異質なものとなったが、関係者や来場者からの反応は良く、美術館のディレクターは、これを機に台湾のエスペラント運動について詳しく調べてみたいと言っていた。

初日のシンポジウムでは、本展出品作家やキュレーター、研究者が登壇し「アジアとは」という問いをめぐる議論。講演後すぐに話しかけてくれたのは台北在住の中国学者ルネ・ヴィエネだった。ローザンヌのCIRAの管理人マリアンヌの親友だという。アンテルナシオナル・シチュアシオニストの一員として、既存の映画を「転用」した作品を作っていた彼は、中国の大衆映画を革命的な内容に変換する字幕を貼り付けた映像作品を本展に出品していた。

2016年にチューリッヒで「Anarchie! Fakten und Fiktionen（アナーキー！ 事実とフィクション）」と題された現代美術展が開かれているが、それにはローザンヌのCIRAが資料を提供している。あらゆる権威を拒否するアナキズムの思想や行動は、芸術家の想像力を刺激するものでもある。美術の分野で当センターの資料が活かされる機会は今後もきっとあるだろう。

【各地グループ紹介①《自由労働者連合》】

底辺下層のより広範な連帯を求めて

松原 秀晃（自由労働者連合）

自由労働者連合は、「底辺下層とアナルコ・サンディカリズムの結合は社会革命の希望足り得るか」という問題意識の下、フリーターや派遣労働者、生活保護受給者、障がい者・病者、元受刑者など、底辺下層のより広範な連帯を求めて大阪における日雇・野宿者解放運動の中から2007年に結成されました。

自由労働者という名は日雇労働者などの非正規雇用や都市雑業などに従事する人々を指すとともに、1920年代の労働運動黎明期において戦闘的に闘ったアナ系労組へのリスペクトであり、権威主義的・中央集権的なものと対極を為すという意味での自由なる労働者の自主的な連合という意味をこめています。

プルードンが定義づけ、クロポトキンが発展させた自由連合主義、相互扶助は、マフノ農民反乱にみられるウクライナ革命やFAI―CNTのスペイン革命で鍛えられ、その後の世界各地の革命反乱のなかで何度も甦り、ノンセクト・ラディカルズや市民運動など現在の各社会運動で当然の原理原則として受け入れられています。

この原理原則を私たちがあえて前面に掲げる理由には、次の状況認識があげられます。

日雇・野宿者など底辺下層の周辺には未だに「人民の前衛」を気取った権威主義的な傾向を持つ政治党派やそのイデオロギーに支配された活動家の影響が根強く、彼らの「政治」に日々利用されています。

彼らは、旧民主党と共に「排除と収容」のホームレス特措法を推進したNPO釜ヶ崎支援機構を典型とするように、行政や国家権力と歩調を合わせて労働貴族の如く振る舞い、日雇・野宿者などは彼ら活動家のメシの種にすらなっています。それは相対的に上層の議会主義的な「民主・リベラル勢力」が「格差の是正」などを掲げて底辺下層に恩恵を与えるかのような幻想を振り撒きながら、反貧困運動等に巧みに近づく手法と近似し、親和的ですらあります。また、当事者不在の融和主義的で慈善的な上から目線の恩着せがましい「支援」運動があります。

1年間で生み出された世界の富（保有資産の増加分）のうち82％をわずか1％の金持ちが独占し、経済的に恵まれない半数（37億人）は財産が増えなかった（国際NGO「オックスファム」の報告書）という報道（『朝日新聞』2019年1月22日）がありました。持つ者と持たざる者の格差はますます拡大し、人類史上に類を見ない格差社会が現実化しています。

私たちは敢えてこうした「時流」に逆らって、底辺下層の解放は底辺下層に生きる私たち自身の手によって為されるべきものと主張します。インターナショナルの原点である「労働者の解放は労働者の手で！」です。

といったことを公言しているので、当然「市民社会」からも孤立しています。世間様は誠に厳しいです。それでも不屈の精神でアナルコ・サンディカリストの旗、アナキストの黒旗を関西の地でしぶとく掲げ続ける所存です。現在、日常的な情宣活動や労働相談などは休止し（労働相談については随時受付）、定例会議を軸に学習会や読書会、機関誌の発行をおこなっています。

こんな私たちのグループに興味を持っていただける同志がおられましたら、声をお掛けください。

E-mail…free_workers_federation@riseup.net

アナキズム文献センター（ふもとの家）にて

出版情報

【書籍】

●『卜部哲次郎（辻潤ノ高弟）・鐵心和尚集（師僧ハ中村戒仙）〔付：「卜哲の追っかけ」〕』卜部哲次郎・著　大竹功・編著　仮立舎　三七八〇円　二〇一八年一〇月刊

（「卜部哲次郎〔うらべ・てつじろう一九〇〇―一九四九、『日本アナキズム運動人名事典』九七頁〈大

月健・筆〉」の記念すべき初の著作集が刊行された。編者・発行人の大竹氏による卜部の案内にして調査探索資料収集の記録である「卜哲の追っかけ（百頁！）」は圧巻。詳細な年譜と略系図付きで、A5判、六一二頁の大著。なお「仮立舎」HPに本書の購入法と「卜部哲次郎拾遺」の項あり）

●『余白の春―金子文子』瀬戸内寂聴・著　岩波現代文庫　一二五三円　二〇一九年二月刊

【雑誌・ブックレットほか】

●『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース（第五八号）』同会発行　二〇一九年一月刊　八〇〇円（この一年間に発表された論文・会報・資料集・書籍等を、大岩川嫩さんが四頁にわたってまとめた巻末の「文献紹介」が貴重！）

●『沓谷だより（復刊第四号）』大杉栄らの墓前祭実行委員会　二〇一九年一月刊（事務局・〒四三五―〇〇一七　浜松市東区薬師町三〇九―二六）（宮本三郎〔『アナ事典』六二五頁〕さんの書簡〔一九九一年一〇月二三日、和田守氏宛〕を「〈資料〉紹介」として掲載）

●『秋水通信（第二五号）』幸徳秋水を顕彰する会（四万十市）二〇一八年一二月刊（なお本通信は「幸徳秋水を顕彰する会」HPのPDFで閲読可）

●「大道寺将司〈狼たちへの挽歌2〉」福島泰樹・著（『月光（五五号）』月光の会　皓星社発売　一〇〇〇円　二〇一八年五月刊）（『トスキナア』を発行（二〇〇五～一四年）していた皓星社で、現在、福島泰樹主宰誌『〈歌誌〉月光』を刊行中！）

●「闇に刻む光：アジアの木版画運動 1930s-2010s」展図録（編集：福岡アジア美術館、発行：福岡アジア美術館、アーツ前橋、二〇一八年）

●「〈黄色いベスト〉運動――私たちの足もとで地面は大きく動いている」デヴィッド・グレーバー著（訳・解題＝片岡大右）（『世界』二月号　二〇一九年一月刊）

イベント情報

トーク「1968新宿―フーテン・テキヤ・全共闘」

1968年、文化渦巻く新宿の街頭から出発し、10・21国際反戦デー、テキヤ、東大闘争と、群衆の中へと入り込み、シャッターを切り続けた写真家・渡辺眸。

同時代を生きた編集者・高野慎三とともに、その写真を垣間見ながらいまへと続く群衆による自力の文化精神を語りあう。

ゲスト…渡辺眸（写真家）

聞き手…高野慎三（編集者）、細谷修平（美術・メディア研究）

日時…3月10日（日）15：00

場所…カフェ・ラヴァンデリア

参加費…1000円以上＋ワンドリンクオーダー

主催…幻燈の会

高野慎三写真展「東京儚夢（ぼうむ）」

関東大震災後に建てられ、いまや消え去ろうとしている東京都心部の銅板建築の数々を、戦後文化を独自に検証する編集者が撮影。懐かしさと移ろいを感じる写真を約百点展示。

日時…3月22日（金）～30日（土）（日曜休館）

場所…千代田区神田小川町東京古書会館2Fラウンジ（入場無料）＊最終日トークショー（7F）会費未定

林倭衛展～残された画帖を開く～

サンジカリズム研究会への参加や1919年の二科展に大杉栄を描いた「出獄の日のO氏」を出品したことなどで知られる林倭衛の回顧展が開催される。ご長女の聖子さん（文壇バー「風紋」元店主）が大事に保管していたという画帖（スケッチブック）も初公開される。

日時…3月4日（月）～16日（土）11：00～18：30（日曜休廊）

場所…中央区日本橋3―8―6第二中央ビル4F　不忍画廊（TEL03-3271-3810）

「まだ見ぬまちへ」青池憲司監督作品上映会

「津波のあとの時間割」「3月11日を生きて」に続く青池監督の石巻ドキュメント映画第3作。非常時のコミュニティ活動の記録であり、ふだんの地域社会づくりへの普遍性を持つ2時間の作品となっている。

日時…3月9日（土）18時15分開場、18時30分～

場所…中野区立商工会館3F大会議室

料金（資料代）…1000円

＊上映後、監督のトークあり

文献センターだより

○**9月18日**　山口・奥沢が八街へ資料を運び（前回は8月30日）、台湾の展示会で使用予定の山鹿資料を持ち帰る。

○**10月3日**　増山・奥沢がふもとの家に。宿舎の片付けと掃除。廊下に備えつけられた〝旅の本〟を整理し、一部処分。合い間に庭の草刈りを少し。一週間ほど前に龍さんが一人で関西に出かけるというちょっとした騒ぎがあった。寂しがっている様子である（現在は月・水・金曜日のヘルパー訪問に加えて、木曜日を話し相手の訪問日として一日増）。

○**11月28日**　増山・奥沢がふもとの家に。引き続き宿舎の本の片付け、本棚の撤去、掃除。きれいな本はヤマト便のリサイクルに寄托（ダンボール五箱）、ほかは処分。

○**11月30日**　現在、当センター公式サイトにて随時更新中の「戸田三三冬業績」について、大阪の櫻田さんから新情報。2点追記。

○**12月3日**　古屋、連日のカレンダー追い込み作業。調べ物でふもとの家に。龍さんは今日も起きておらず。目当ては無産婦人同盟について調べるため、近藤真柄さんの『わたしの回想』を閲覧。

○**12月15日／1月23日**　奥沢がゴミの処分に寄る。なお年末・年始は大阪の娘・恭子さんがふもとの家に。

○**12月16日**　成田氏に入稿をお願いしてカレンダーが校了。合間に通信の制作があったからかなり慌ただしかった。来年はテーマが決まっているので早めに動きたい。

○**12月22日**　大阪からSさんが来宮。古屋が書庫にご案内。書庫そのものの見学ほか、神戸共同文庫関連資料など探す。資料整理についてのアドバイスや所蔵している同文庫の資料名のテキスト化などしてくださり大変に感謝。

○**12月26日**　古屋、奥沢さんに頼まれたふもとの家のゴミ捨て。郊外の清掃工場まで捨てに行く。2回連続で龍さんに会えていなかったので心配していたが、この日ヘルパーさんに会え、とりあえず元気なことを聞いてホッとする。

○**1月4日**　北海道から「柏木隆法追悼」の通信を希望する方から問い合わせ。送ったところ通信自体を気に入ってくださったようで、入会いただけるという。その後のやりとりで平民新聞読者会のことなどを独自に調査されているとのこと。ぜひ寄稿を、とお伝えする。

○**1月10日**　若い方から入会希望が来る。新宿ＩＲＡでセンターを知ったとのこと。大杉栄や伊藤野枝を読んでいるが周りに詳しい人がいないので色々と知りたいという。期待に添えるように取り組まねば。入会特典のアイデアを思うつく。

○**1月14日**　東京でセンター通信の編集委員会。古屋はネット参加。ページ数の増加による発送作業の面などからＡ5版への変更を提案していた判型については結論が出ず。当面の3号分は現行通りとし、再検討となった。（判型のご意見をぜひお聞かせください！）

○**1月24日**　当通信を置いてくださっている本郷東大前にあるRiver Coffee & Galleryさんがツイッターで「最近アナキズム文献センター通信を手に取ってくれる人が多い。うれしい。最新号残り僅かです」と。こちらも本当にうれしくなるコメント。感謝。

○**1月29日**　新たに入会希望者あり。最近は本当に入会希望が多い（その後スムースに入金してくれるわけでは実はないのだが）。ある方がツイッターで「アナキズム文献センター通信で知った映画。観に行く！」と『金子文子と朴烈』の鑑賞宣言。通信が新たな出会いになっているのはとてもうれしい。

編集後記

○『センター通信』46号から編集に携わってほしい、と頼まれ軽い気持ちで了承したのだが第一回の編集会議以降、日を追うごとに定期刊行物を編集する事の責任を痛感した。四半世紀前にもアナ系月刊紙の編集部に属した事はあったが、当時は小間使いの編集委員であったから紙面の充実など考えにも及ばなかった。だからといって本号が読者諸氏に十分満足して頂けるものになっている自信はない。今後一層努力をする所存である。（山口）

○今号より編集のお手伝いをさせていただくことになりました。見よう見真似で組版をやってみましたが、うまくできないところも多く、奥沢さん、古屋さんに助けていただき、なんとか形になりました。お気づきの点やご意見があれば、お知らせいただければ幸いです。（高橋）

アナキズム文献センター通信第46号
発行／2019年3月1日
発行所／アナキズム文献センター
編集／編集委員会
連絡先／東京都新宿区新宿1－30－12－302
郵便振替口座／00850－3－30010
口座名　A文献センター
Eメール／contact@cira-japana.net
定価／一部100円